

〔1〕 次の文は、有力者であった民部卿顯頼のもとを、近衛の少将への任命を望むある公達が訪ねた際に、両者の取り次ぎ役をつとめた顯頼の侍が演じた失態を描いた話である。よく読んで、あとの問いに答えよ。

九条民部卿顯頼あきよりのもとに、あるなま公達、年は高くて、近衛司を心がけ給ひて、ある者して、「よきさまに奏し給へ」など言ひ入れ給へるを、主うち聞きて、「年は高く今はあるらむ。なんでふ近衛司望まるるやらむ。出家うちして、かたかたに居給ひたれかし」とうちつぶやきながら、「『細かに承りぬ。ついで侍るに、奏し侍るべし。』^Aこのほどこいたはることありてなむ、かくて聞き侍る。いと便なく侍り」と聞こえよ」とあるを、この侍、さし出づるままに、「申せと候ふ。『年高くなり給ひぬらむ。なんでふ近衛司望み給ふ。かたかたに出家うちして、居給ひたれかし。』^B、細かに承りぬ。ついで侍るに奏すべし」と候ふ」と言ふ。

この人、「しかしかさま侍り。思ひ知らぬにはなけれども、前世の宿執にや、このことさがり^Cがたく心にかかり侍れば、本意遂げて後は、やがて出家して、籠り侍るべきなり。隔てなく仰せ給ふ、いとは本意に侍り」とあるを、そのままにまた聞こゆ。主、手をはたと打ち、「いかに聞こえつるぞ」と言へば、「しかしか、仰せのままになむ」と言ふに、すべて言ふばかりなし。

〔出典〕

『十訓抄』第七 思慮を専らにす
べき事

〔重要語句〕

- 公達
- 奏す
- なんでふ
- 便なし
- 聞こゆ
- 本意
- やがて
- 仰す
- いとど
- あさまし
- おろかなり
- いまそかり

この使にて、「いかなる国王、大臣の御事をも、内々おろかなる心の及ぶところ、さこそうち申すことなれ。それを、この不覺人、ことごとくに申し侍りける。^D あさましと聞こゆるもおろかに侍り。すみやかに^E 参りて、御所望のこと申して、聞かせ奉らむ」とて、その後、少将になり給ひにけり。まことに、言はれけるやうに、出家して^F いまそかりける。

問一 傍線部 A・D の意味として最も適當なものを、それぞれ次のイ～ニの中から選び、記号で答えよ。

- A イ 近頃病氣がちでして、
 ロ 近頃心配なことがありまして、
 ハ 近頃都合の悪いことがありまして、
 ニ 近頃氣の毒に思うことがありまして、
 D イ お氣の毒な様子だと聞くにつけても、おろかなことをしました。
 ロ あきれたことだと申しあげても、言葉に尽くせないことです。
 ハ 驚くべきことをしたと聞くにつけても、愚か者だと思えます。
 ニ あさましいことだと評判になるのは、ばかげたことです。

A	
D	

問二 空欄

B

 に入る接続詞として最も適当なものを、次のイ～ニの中から選び、記号で答

えよ。

イ されば ロ さりとは ハ さりながら ニ さるほどに

問三 傍線部 C・E は誰の動作か、それぞれ次のイ～ニの中から選び、記号で答えよ。

イ 帝 ロ 顕頼 ハ 公達 ニ 侍

C		E	
---	--	---	--

問四 傍線部 F の動詞の活用の種類として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、記号で答えよ。

イ ラ行四段活用

ロ ラ行上一段活用

ハ ラ行上二段活用

ニ ラ行下二段活用

ホ ラ行変格活用

問五

本文の内容に合わないものが次のイ、二の中に一つある。それはどれか。記号で答えよ。

イ 公達は、民部卿をまったく恨んだりはしなかった。

ロ 公達は、もともと出家の願いを持っていた。

ハ 民部卿は、当初から公達を近衛司に推薦するつもりだった。

ニ 民部卿は、公達のことを以前から知っていた。

問六

本文は、鎌倉時代の説話集である『十訓抄』の一章段である。同時代の説話集を、次のイ、二の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 日本霊異記 ロ 閑吟集 ハ 堤中納言物語 ニ 古今著聞集

ホ 今昔物語集